

## 机の上の小さな変革

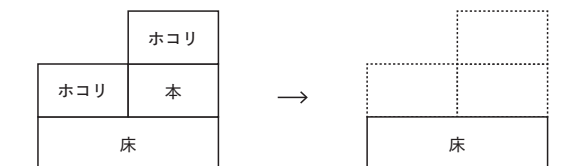


## 層の発見

こんにちは、菅俊一です。今回は、日常のさまざまな行為を「積層されたもの」(積み重なっているもの)として見ることで、行為に潜む特徴を捉える新しい視点について考えてみたいと思います。

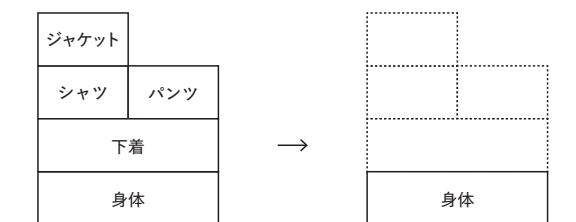
「積層されたもの」として見るとは、どういうことでしょうか。たとえば、床掃除をするという状況で考えてみると、図1のように、床の上にホコリや本が積み重なった状態から、上の層に積み重なった物を取り除いていく操作であると捉えることができます。

図1



また、服を脱いで風呂に入るといった状況であれば、図2のように、身体の上に下着、その上にシャツやパンツ、さらにその上にジャケットなどが積み重なって着られているとして、上のレイヤーから順番に取り除いていくプロセスと捉えることもできます。

図2



このように、一見積み重なっているように見えないものも、強引に積層された構造を持つ集合体として捉え直してみると、さまざまな事物が「最初に置かれたものが一番下になる」「下のレイヤーには、上を取り除かないとアクセスできない」といった順序の制約があることがわかります。

## 日常の行為の「構造」に発見がある

こういった構造は、物流などの分野では「FILO (First In Last Out)」と呼ばれています。たとえば倉庫では、一番最初に入れた荷物は最後にしか取り出すことができないように、順序が構造的に決まってしまうことがあります。

同じようなことは日常のなかにもあり、たとえばパフェであれば、最初にカップの底に入れたアイスは、必ず最後に食べることになります。「入れる」ということと「積み重ねる」ということは異なる動作ですが、こうした「積層構造」として見ることで、行為の順番やアクセスの仕方について改めて考えることができます。



日々の掃除や着替えといった行為も、実は「層を操作し探索しているプロセス」だと気づくことができれば、たとえば「一番下にあるものを直接取りたい」という場面では、順序を反転させたり、途中を飛ばしてアクセスするための工夫を考えることもできます。

「構造から考える視点」によって、効率化や思わぬアプローチのヒントを得られるかもしれません。



## PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』『ルール?本』など。